悪魔の風

架埜　氷菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔の風

【Ｎコード】
Ｎ２３５５Ｑ

【作者名】
架埜　氷菜

【あらすじ】
とある付属中学校の６年生、「起東　優」。
優は学校一の美少女、「鳩羽　柚理」に告白した。返事は、ＯＫ。
しかし、その瞬間から、優と柚理の冒険の旅は既に始まっていた。
二人の前に次々と現れるのは、人間の弱い心を狙い、魂を吸い取る悪魔。イヴとアダムの生まれ変わりである、優と柚理は、「イヴとアダムの悪魔倒し」の主人公となり、悪魔倒しの旅へ出る。
新たな仲間との出会い。そして、別れ。

悪魔倒しの戦士達の旅が今、始まる――――!!

―プロローグ―（前書き）

色々登校中ですが何か？

ってのは冗談だ。色々投稿するつもり。

一応、時間もないもので・・・。

時々、投稿しますね。

あ、ちなみに中学生でっす（・ω・）

初めて書いた小説（小６のときのもの）なんで、

なんか変だったりするかもしれません（＾Д＾；）

んまぁ、そこは気にしないでください☆（↑

―プロローグ―

いつも僕は、柚理が身に着けているネックレスに何か引っかかる。
生まれた時から着いていた透明のピアスに…

僕、「起東　優」は、学校一の美少女「鳩羽　柚理」に告白した。
「すっ好きです！あ…あの、付き合ってください！」
桜が舞う校門の前、柚理からの返事は、
「いいよ」
「え？いいの？」
「うん」
返事はＯＫだった。

帰り道、嬉しすぎて顔が赤くなった。四年生の頃から好きだった柚理と付き合えるなんて夢のようだ。
心の中は桃色パラダイス。なんていい一日だろうか。
しかし、そんなことを考えていられたのも、つかの間。
ブー子がやって来た。
「優くぅーん」
ブー子は家が隣で、幼稚園の時からずっと同じクラス。いつも僕の前では、いい子ちゃんになる変な奴だ。
そんなブー子はいつものように聞いてくる。
「ねぇ～、優君は誰が好きなのぉ～？」
ウザイ。ストレスが溜まるから近寄らないでくれ。
「だから、好きな人なんかいねーよ」
それだけ言って、早歩きで家に向かう。が、ブー子はこんな事を言った。
「えぇ～？優君はぁ～あたしのことが好きなんでしょ～？このはずかしがりやさーん」

具合が悪い。今、ここにクラスメイトが居たらどうなっていただろうか。きっと変な誤解を招いていただろう。
もう嫌だ。ここはズバっと言って逃げるしかない。
「何言ってるんだよ。オマエみたいな奴を好きになる奴なんかいねーぞ？」
だが、ブー子には言ったことが全く通用していない。
「優君ったら本当に恥ずかしがりやさんねぇ！そんな事言って本心はあたしのことが好きなんでしょぉ～」
全くだ。もう、こんな奴とは二度と会いたくない。
僕はそう思いながらイルミ岬の方へ走っていった。
「なんて奴だ」
冷たい風が髪を揺らす。
少し曇り気味の空。
今まで感じたことも無い雰囲気。
今の自分がいる世界に何かが起こっている気がした。
「優君っ！」
とたんに後ろから柚理の声がした。
息切れしていて、見た感じ走ってきたようだ。
「どうしたの？柚理」
「優君…蓋子ちゃんのこと…好きなのっ？」
「え……？」

第1章　第1話　始まり（前書き）

１話です。
そして、第１章です。

実は、予定としては第１０章まであります（↑
え？冗談じゃないかって？
冗談じゃないですよ。はい。
ボクはいつでもまじめです。

でも、１０章って・・・先が遠いですよね。
というか、昔書いたものの・・・一話一話が短い。
それをちょっと編集してるんで・・・・

長くなりますかね・・・・・

ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ☆

第1章　第1話　始まり

柚理が言ったことが分からなくなってきた。
ブー子のことを好きなのかって・・・そんなの僕が聞きたい。一体、その話は何処から出たんだ。
「っ…僕は柚理のことが好きだよ！誰がそんな事を言ってたの？」
すると、柚理は衝撃的なことを言った。
「さっき、リイツ公園の前で蓋子ちゃんに『優君はあたしのコトが好きなのよぉ～！だから、取らないでくれない？』って言われたんだけど…」
「ブー子…？」
一体、何の話だろうか。僕はブー子のことを好きなんて言ってない。むしろ死ねって思うほど嫌いだ！
「僕は、ブ…いや、蓋子のことは好きじゃない…！僕は誰よりも柚理のコトが好きなんだ！」
柚理の顔が一瞬にして赤くなった。そんな状況で沈黙が続く中、急に変な音と共に変な声が聞こえた。
その変な声は、
「優く～ん！」
ブー子だった。
後ろを振り向くとそこには、変な走り方でこっちに走ってくるブー子の姿があった。ブー子は顔を真っ赤にして僕と柚理の前で止まった。僕も柚理も一瞬にして、病人のような青覚めた顔になった。
「優君！あたしのこと、誰よりも愛してるってホントぉ！？」
僕は瞬間的にロケットに乗って宇宙の何処かへ飛んでいきたくなった。
何を言い出すかと思いきや、僕がブー子のことを好きだって？ふざけるなよ。僕は柚理に対して言っただけで、ブー子にはいってない。

しかも、「愛してる」なんて言葉は僕の口からは出ていない。
もう、死んでもいいからブー子から逃げたかった。
「ぼ……僕は柚理が好きなんだ！」
そう言って僕は、柚理の横に立つ。しかし、この行動は間違っていた。
ブー子の顔は一瞬にして変化した。

しまった……

完全に地雷を踏んでしまった。
ブー子の顔は鬼を超えた……いや、この地球上にいるブスを超えた。
ブー子と長年一緒に居た僕でも、こんなにブスな顔のブー子は初めて見た。
「己…優…ふざけんじゃねぇ！！！！！！！」
ブー子はものすごい形相で追いかけてきた。僕は、柚理の手を握って、家まで走った。
しつこくブー子はブス顔で追いかけてくる。いっそ死んで天国まで逃げたい。
途中で躓いて転びそうになったが、なんとか転ばずにまた、走った。
走り続けて7分は経っただろうか。ようやく家に着いた。
急いで家に入り、鍵を閉め、自分の部屋に逃げ込んだ。そして、狭いクローゼットの中に隠れた。
何とか、ブー子から逃げ切れた。
未だに心臓がバクバク鳴っている。
「はぁー…」っと僕はため息をついた。
「ごめんね・・・こんなことに巻き込んじゃって…」
「大丈夫。私だって少し蓋子ちゃんに悪いことしちゃったから」
柚理はブー子のことについては、何も悪口を言わなかった。
色々あって、疲れたから、僕は、深呼吸をした。
その瞬間、

バンッ――…

家のドアが悲鳴を上げた。
ブー子が家に入ってきたのだ。
ブー子が家に入ってきた。何故、入ってこられたのか。鍵はしっかり閉めたはず。
それは、いつだったか…

「やめてよっ、僕の鍵返してっ」
「やぁーだ。優君の家の鍵は蓋子のモノだもんっ」
「何でっ？返してよー」
「優君は蓋子と結婚するから一緒に暮らすために持ってなきゃいけないのぉ」

そうだ、小学校一年生の時に、ブー子に奪われたんだ。
あれから、ずっとほっといていたけれど、まさか……
僕の鍵は今までに色々なことで使われている可能性がある。何だか怖くなってきた。
「優～？何処に居るのぉ～？出てこないと大変なことになるわよぉ…あんたの命がね！」
一瞬にして、鳥肌が立った。
ブー子の声は静かな僕の家に響き渡る。

シャッ…シャッ……

突然、刃物同士がかすれ合う音が微かに響き渡り、ギシギシとブー子の重い体重に耐えるように床が叫ぶ。
床の叫びはどんどん大きくなっていく。僕は、息を殺し、ブー子に見つからないことを願う。

しかし、その願いは届かなかった。

バキッ！

ブー子は僕たちの隠れている部屋のドアを簡単に破壊した。どうやら巨体を使ってドアをぶち破ったらしい。もう、僕は半分諦めていた。

「優？この部屋に居るんでしょう？　さっさと出て来い！弱虫が！」

生きている間に心の中でこう思っておく。

『僕は確かにこの部屋に居る。でも、ココからは出ない。まず、殺されそうになっているのにココから出たら、殺されるに決まってる。自殺行為なんか誰もしない。ブー子の言ったことは、誰もこの状況で行うことなんか出来るはずは…』

ドスッ…ドスッ……

こんなこと思ってる僕の気配を察したのか、ブー子が僕と柚理の隠れているクローゼットのほうに寄ってきた。

「ふふふ…お前の死ぬ時がきたぞ…起東　優！」

とうとうブー子は僕たちの居るクローゼットの目の前に立っている。クローゼットの隙間から刃物らしきものが光るのが見えた。

『もう…僕は…終わりだっ！』

そう思った。ブー子がクローゼットに手を伸ばした。

その時、

ガチャ――

「蓋子ちゃん～？おやつの時間よ～！」

ブー子のお母さんが来た。

「はぁ～い！今行くねぇ～！」

ブー子はさっきと全く違う声で返事をした。
そして、ブー子がこの場から離れる時、クローゼットの隙間から見えたのは、僕のことを呪い殺そうとするような表情のブー子。
僕と柚理を睨みつけた。
そして、
「明日は絶対に殺してやる…」
そう言ってブー子は家に帰っていった。
僕と柚理はブー子から逃れられた。

第1章　第1話　始まり（後書き）

～キャラの名前の読み方～

・起東　優　（きとう　ゆう）
・鳩羽　柚理　（はとば　ゆり）
・蓋子　（ぶたこ）【通称：ブー子】

ブー子　怖し＾ｐ＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2355q/

悪魔の風

2011年1月26日12時20分発行